

シュリー・ハヌマーンの大跳躍

ラーマヤナの物語より

第1章

仕える決意

強さと勇気そして決意で知られるシュリー・ハヌマーンは、サル一族であるヴァナラ族の王、スグリーヴァの相談役になりました。その立場から、彼は、その頃キシキンダーの森に追放されていたアヨーダヤーの王子であるラーマ神と弟のラクシュマナに会いに行きました。

ハヌマーンが王子たちを見つけたとき、彼らは苦行者のように木の皮でできた衣をまとっていました。しかしハヌマーンは、ラーマ神を見た瞬間に彼の偉大さを認め、神の神聖さを知覚しました。

ハヌマーンは、幸福感、崇敬、感謝の念で圧倒されました。彼は自分の師を見つけたのです。そして、この日から自分はラーマ神に心から仕えるのだと分かりました。

ハヌマーンは、ラーマ神が不当に追放されたうえに、10の頭を持つラーヴァナと呼ばれる鬼神の王が、ラーマ神と森に住んでいた最愛の妻、シーターを誘拐したことを知りました。シーターが行方不明になってから、彼女を見た者はおらず、何の知らせもありませんでした。

ハヌマーンは、ラーマ神を助けたいと熱望しました。

「神よ、私たちヴァナラ族はよく利く目を持っています」と、彼はラーマ神に言いました。「遠くまで見渡せる高いところに登り、人間が行けないところを気づかれずに通ることができます。私たちにお妃を探させてください。あなたの最愛のシーターを見つけられるのは、私たち以外にはありません」

ラーマ神は、目の前に立っている美しい高貴なサルを見詰めました。

「お前は、勇敢で強い意志の心を持っている」と、ラーマ神は言いました。「これは生易しいことではない。しかし、お前なら、やり遂げるだろう」

「神よ、やってみせます。何も私を止めることはできません。お妃を見つけるまで休みません」と、ハヌマーンは言いました。

そこで、ラーマ神は、シーターの美しさ、気高さ、着ていた黄色いサリーについてハヌマーンに話しました。誘拐がいつ、どこで起こったかを詳しく話しました。最後に神は、指にはめていた指輪を外し、ハヌマーンに手渡しました。

「彼女を見つけたら、この指輪を渡しなさい」と、ラーマ神は言いました。「そうすれば、私がお前を送ったのだとわかって、彼女はお前を信じるだろう」

ハヌマーンは、手のひらを丸めて指輪を受け取り、驚きに満ちて見詰めました。指輪にはラーマ神の名前が彫ってありました。実にそれは、名前によって振動しているのです。ハヌマーンは、指輪を恭(うやうや)しく額に付けました。

「神よ、私はこの指輪を私の胸元に身に付けておきます」と、彼は言いました。

「そして、あなたのお妃以外の者に絶対に手を触れさせません」

翌日、ハヌマーンはサルとクマの軍隊を引き連れて、シーターを捜しに出かけました。キシュキンダーから南方へ、山や森、平原をくまなく捜しましたが、彼女の姿も痕跡も見つけれません。何週間もの探索の後、彼らはインドの最南端の地にたどり着きました。彼らは砂浜に座って、果てしなく広がる海を意気消沈して見詰めました。シーターは一体どこにいるのでしょうか。

すると、老いたワシが飛んできて、彼らの間に舞い降りました。ワシは彼らがシーターについて話しているのを聞いて、話すべき大事なことがあるようでした。

サルたちは、ワシが何を言うのかと用心深く周りに集まってきました。

「ラーヴァナ王が、6ヶ月ほど前にこの海岸の上を飛んで行った」と、ワシは言いました。「彼は腕に美しい女性を抱えていたよ」

この言葉に、サルたちは皆、耳をそばだてました。

「でもその女性は誰なのだ」と、ハヌマーンは聞きました。「それはシーターでしたか」

「シーターだ」と、ワシは言いました。「彼女は黄色いサリーを着て『ラーマ！ラクシュマン！ 助けて！ 助けて！』と叫んでいた」

サルたちは興奮で身震いしました。「どっちの方向に飛んでいきましたか」と、ハヌマーンは尋ねました。

「南だ」と、ワシは言いました。

「南には海しかない」と、ハヌマーンは言いました。

「海の向こうに、ランカーと呼ばれる島がある」と、ワシは説明しました。「その山の頂にラーヴァナの王国、ランカープリーがある。私が若かった頃、その上を何回も飛んだことがある。そこに行けば、あなた方が探している女性がいるだろう」

「海はどのくらい広いのですか」と、ハヌマーンは彼に聞きました。

「とても広い。飛べなければ行き着くことはできない」

サルたちは、この言葉にがっかりしてしまいました。ハヌマーンさえも無言でした。するとクマの王であるジャンバヴァンが発言しました。

「あなたは自分が誰であるか忘れてしまったのですか」と、彼はハヌマーンに尋ねました。「あなたは風の神であるヴァーユの意志から生まれたのです。彼のように、あなたはどこへでも旅することができます。あなたには森をなぎ倒す強さがあり、そして強固な壁のほんの隙間でさえ通り抜けることもできます。あなたは、子どもの頃からブラフマ神とインドラ神の保護を得ています。スーリヤ神は、自らあなたにヴェーダを教えました。この広がる海を渡る力が無いなどと、あなたはどのように思うのですか」

クマの王の言葉で、ハヌマーンは目を覚ましました。「もちろんだ！」と、彼は自分に言い聞かせました。「ラーマ神は、私がこの神聖な使命をやり遂げられると信じたからこそ、任せてくれたのだ。私はどうして自分の力と偉大さを忘れてしまったのだらう」

すると、偉大なるサルは、どんどん大きくなっていきました。

「私はここから一番近い山の頂に行こう」と、彼は言いました。「そこから私は、世界が今まで見たことのないような跳躍をしよう」

それを聞くと、他のサルたちは息をのみました。

「あなたは、ランカーまで海を跳び越すつもりですか」と、1匹の小さなサルが尋ねました。

「海を跳び越えてみせよう」と、ハヌマーンは言いました。「ラーマ神の命令に従うには、他に方法がないのだから」。彼は、今や仲間たちよりはるかに高く、巨大になっていました。彼の頭は、木々のこずえよりも高くなっていました。

巨大な歩幅で、ハヌマーンはマヘンドラ山に向かって歩いて行きました。彼の体重で地面は震え、驚いた鳥は、鳴き声を上げて木から飛び立ちました。彼は森を通り越すと、頂上の極めて硬い岩から周りを見回しました。陸地が海岸に落ち込んだ先に、広い、広大な海が見えました。遠くのかなたに、未知の島の

輪郭がうっすらと見えました。ハヌマーンは今、どれだけ遠くまで跳躍しなくてはならないかを理解しました。

彼は、北、西、東の神々に敬虔なお辞儀をしました。そして南を向くと、ヴァーユ神に頭を下げて祈りました。——風のように、遠い岸まで跳べますように。胸に携えているラーマ神の指輪に触れ、神の恩恵が自分と共に在ることを祈りました。

それから、腕を天に向けて、宣言しました。

「私は、ラーマ神が引く弓矢のようにランカーに向かって跳躍します。私は、シーターを必ず見つけます」。

そして、彼の心はラーマ神に定まり、マインドは神の命令を果たすことに集中し、ハヌマーンは空中へと跳び上がりました。

続く...